

## 伊豆山唐辛子菩薩

### ながのとしお

原ペーニヨは布団の中で考えていた。

まだ夜の九時だが、彼はいつもこのくらの時間には布団に入る。早めに布団に入って寝るまでの間ぼーっと考えるのが、彼の人生の中の大きな楽しみのひとつなのだ。隣の布団では双子の娘、ななみ菜波が寝ている。そして襖を隔てた六畳間からは妻の真澄がため兵衛とふたり酒を飲みながら静かに話しているのが微かに聞こえてくる。さて、ペーニヨは考えていた、と書いたが、彼に関しては、考えるという言葉はあまり適切とは言えない。むしろ、頭の中をイメージが駆け巡る、といったほうが幾らかは事態を正確に表現することになるだろう。いや、駆け巡る、といえは耳慣れた感じがしてイメージが湧きやすいだろうが、これもペーニヨの場合、実はふさわしくない。強いて言えば、歩き巡る、とてもなるつか。しかし、歩き巡るといつ風変わりな言葉を使ったところで、彼の思考のある部分は表されるにしても、まだ正確さに欠けるきらいがある。もう少し肌理細かに描写するとすれば、あるイメージは駆け巡り、別のイメージはふわふわと漂い、さらに別のイメージは背景をなしながらゆったりと色合いを変えていく、とても書くほかないだろう。

「ここで少し普通に、そのとき彼の頭にあつたことを言葉にしてみよう。するとそれはこんなことになる。最低限必要なものは、唐辛子、それと塩、で、ある意味肝心なのは酢、だよなあ……。」

そもそもペーニヨは考えることが苦手だった。苦手ならば無理に考えることはないのだし、おまけに彼には考えなくても生きていける類稀な才能があつたのだが、なにしろ彼の中には考えることへの密やかな憧れがあつたのである。自分がため兵衛に魅かれるのは多分そこらに一つ理由があるのだろうと、ペーニヨは思った。ため兵衛はホントに考えるのが好きだもんなあ……。」

ペーニヨが考えることに対する憧れを持つようになったのは、はつきりとしたきっかけがある。中学三年のとき、同じクラスに古波南無子という女の子がいた。彼女は数学のテストはいつも学年で一番という噂で、けれど別にガリガリ勉強するタイプには見えなかつた。ペーニヨは美術以外の科目は軒並み下から数えて何番目といった成績である。ペーニヨの目には南無子は、人類よりはるかに知性が高い超文明を築き上げた異星人のように映っていた。彼女、宇宙船が故障してしよがなく地球人のふりをして暮らしてたんじゃないのかなあ……。」

ペーニヨの頭の中に一つの場面がもやもやと形を取りはじめていた。それは中学三年のある初夏の日、たぶん六月、だったかなあ……。その日は学校の行事で、林間学校というのか、キャンプ場のようなところへ行って飯盒炊爨をした。ペーニヨと南無子は同じ班分けになり、しかも新で火を起す係りが二人には割り当てられていた。割り

当てられていた、といつても、ペーニヨの場合、自ら火起しの係りを希望したのである。ペーニヨは父親が釣り好きだったので小さい頃から父に連れられてよく釣りに行った。けれど彼は釣り自体にはそれほど関心を持たず、父がコーヒーを入れたりラーメンを作ったりするために起こす焚火のほうに強く魅かれたのだった。ペーニヨは釣りに行く度に燃やしきれないほどの焚木を集めては、それを少しずつ大切に燃やし、炎がチロチロと踊る様を飽くことなく見つづけた。それがペーニヨの子ども時代の至福のひとつ時だったのである。

そんなわけでペーニヨはその飯盒炊爨の日も炎の踊りを見ようと楽しみに待つていたのだが、その日はやや勝手が違った。キャンプ場の薪の管理が悪かったのだらう、気持ちよく炎を上げてくれるはずの薪は、雨で重く湿り、おいそれと火が回らないのである。その時の、じつとりと重たい薪の質感がペーニヨの頭の中に蘇える。そつ、あの時、その質感とともに、こりや弱つたなあ、どうしたもんかなあ、といった感じの曖昧とした不安が拡がっていき、それが臨界点を越えたとき、どこからともなく答えがやってきた。仕方ない、なんか燃すものを探しに行こう。

学校の行事の最中に持ち場を離れるのはやや気が引けたが、焚きつけの古新聞もロクになく、他の班を見回してもどこも火が起こせていない状況からして、少しくらいの自由行動に問題はあるまいと、ペーニヨがはつきりそう考えたわけではないのだが、何もしないでペーニヨが火を起こすのを見ていた南無子に、おれ、ちょっと、と言つてその場を離れようとしたとき、南無子は一体どうするの？ という問いかけの眼差しで見たものの、何も言わずに彼が行くままに任せたと

ころからして、たぶん二人の間にはそんなふうな共通の理解があったに違いない。

ペーニヨが乾いた枯れ薄と枯れ枝を一抱え持つて戻ってきたときには、呑気に構えていたであろう教師たちもようやく状況に気づき、追加の古新聞や段ボールを配り始めていたが、ペーニヨはそれには見向きもせず、慣れ親しんだやり方で焚火を始め、今度はしばらくすると薪にも十分火が回り、結局彼らの班は他のどこの班よりも早く飯とカレーを作ることができたのだった。

さて、ペーニヨが火を起こすのを黙って見ていた南無子だが、カレーの鍋がぐつぐつ煮え始めたとき、初めて口を開いてこう言った。

「原くん、火つけるのうまいのね」

「うーん、好きだから……。よく、やるんだ……」ペーニヨはぼそぼそと答えた。

「あー、そんなのやったことないから、ちょっと楽しそつだなんて思つて」

「楽しいよ。おれ大好きなんだ……」

二人の会話はそこで途切れかけた。けれどペーニヨの中に、もう一步踏み出せと、背中を押されるような感覚が走った。

「古波さんは何が好きなの？」

「あー、」南無子は想像もしていなかったことを尋かれたかのようにな、目を見開いて目玉をクルクルと回した。

ペーニヨはよく分らないながら、まずいことを尋いてしまった気がしてどぎまぎした。長い沈黙が続いた気がしたが、たぶん実際にはほ

んの一秒が二秒のことだったにちがいない。今のペーニヨには確かにそう思える。

「あたしが好きなのはね、えーと、辛いものと、あと数学、かな」

「辛いもの、と……？」ペーニヨは、辛いものという答えがあまりに意外だったので、そう言ったのだが、南無子はそうは取らず、あとの言葉が聞き取れなかったのか、というところで答えた。

「うん、それと数学ね」

それで、ペーニヨは話を合わせて、という以上に数学の話が聞きたかったからでもあるのだが、尋ねた。

「数学ってどういうところが面白いの？」

「えーと、そうだな、積み木遊びみたいなもんかな？」

「積み木遊び……」数学というものを問題を解いて答えを出すものとしか考えたことのなかったペーニヨにとって、その言葉はこれまた予想外のものだった。

すると南無子はペーニヨの考えを読んだかのように答えた。

「数学ってね、問題を解いて答えを出すっていう、まあそーいうものあるんだけど、どっちかっていうと、ある命題を自分で考えて、それが本当かどうかを確かめたりすることなんだよね。積み木の話でいうと、これだけの積み木があったとき、こーいう家が作れるかとか、この家を作るためにはあとどんな形の積み木がいるかとか、そーいうことを考える遊びなわけ」

それを聞いたペーニヨの頭の中は、数字や記号の書かれた様々な形と色の積み木で溢れんばかりになった。いくつかのものはゆっくり漂いながら組み合わさったかと思うと離れていき、また別のものは地面

にいくつか重なって家らしきものを形造りもしたが、やがてすべての積み木は重力に屈してどんがらくしゃりと崩れ落ちて塵と化した。

「ちよっと分りにくかったかな？」南無子に尋ねられてペーニヨは我に返った。

「あ、いや……。なんとなく分った気がする……」言葉で分ったというほどに分ったわけでもなかったが、彼なりのイメージがつかめた気がしてペーニヨはそう答えた。

南無子は普段の無口さからして喋りすぎたと思ったのだろうか、それ以上は何も言わず、二人の会話はそこで終わりとなった。

そー、あのとときペーニヨの中で、考える、ということに対する感覚がある変形を始めたのだ。今のペーニヨにもそれがどういうことだったのかうまく説明することはできないのだが、考える、ということが自分には手の届かない特別なことではなく、多分いくらか練習をすれば自分にもできることに違いはないという、漠然とした確信とでもいうものが彼の中に生まれたのである。

それ以来ペーニヨは様々なことを考えてみよつとするようになった。頭の中で積み木遊びを始めた。だからといって数学の成績がよくなるといった類たぐいの現実のご利益があったわけではないのだが、ペーニヨにはそのときはっきり分ったことがある。それはつまりこーいうことだ。勉強というのは所詮パズルに過ぎない。パズルが好きなやつもいれば嫌いなやつもいる。得意なやつもあれば苦手なやつもいる。釣りだつて焚火だつて数学だつて、その意味ではみんな一緒だ。だから勉強ができないからといって何も尻込みする必要なんてない……。自

分の成績が悪いことに、ぼんやりとした劣等感を感じていたペーニヨは、おれはもつと自信を持っていいんだ、と直感したのである。しかし、これはペーニヨが考えたことではない。ペーニヨの頭の中では、ただ色とりどりの積み木が乱舞して、不可思議なパズルの秘密を囁きながら、神秘の世界へと彼を誘っていたのである。

ペーニヨを包んでいた懐かしいあの時の空気が次第に薄れていき、彼は自分が 考えて いたことを思い出した。 そうだ、夏みかんを使うのもいいなあ、南伊豆のやつらに頼めばいくらでも手に入るだろう……。 それとやっぱり唐辛子だ、タイのプリッキヌー、メキシコのハバネロ、ネパールや韓国のも捨てがたいなあ……。 と、そのとき、ペーニヨを再び記憶の場面が打った。 そうだ、おれが唐辛子好きになったのも、あの娘のおかけだったんだあ……。

無事カレーとご飯の準備が整い、毎毎に食事が始まった。 飯が柔らかすぎるだの固すぎるだの、ジャガイモが煮えてないだの、人参は食えないだの、皆がにぎやかに食べ始める中、南無子は自分のバッグの中から何やら袋を取り出すとそれをふりかけてもかけるようにカレーの器にざらざらと振り入れた。 とんりの女の子が高い声を上げた。

「南無子おー、あんた何してんのよあー！」

南無子は輪切りの唐辛子を自分のカレーに山盛りかけたのだった。

「あれ？ やっぱ、ちよつと多すぎたかな？」

「多すぎも何も、そんなの食べれるわけじゃないじゃん!!」

「え、そんなことないよ？」そういつと南無子はスプーンでサツと

カレーに唐辛子を混ぜ合わせパクリと食べた。

そのあと何がどういう順序で起こったのか、ペーニヨはよく憶えていない。 女子のキヤーカー騒ぐ声、男子のはやし立てる声、南無子から唐辛子を奪い、人のカレーにふりかける悪ガキ……。 その騒がしさの中で黙々と幸せそうにカレーを食べ続ける南無子と、それを何やら眩しい想いで見ている自分とが、映画の一場面を見ているかのようペーニヨの頭に蘇っていた。 そう、あの時からだ、おれが辛いものに挑戦するようになったのは……。

そのとき以来、南無子とはほとんど話もしていない。 高校も当然別々で、中学を出てしまえば彼女と会うこともなかった。 中学を卒業してからすでに二十数年の歳月が過ぎ、彼女のことを思い出すことも絶えてなかった。 ところが、こうして昔の記憶が蘇ってきたとき、彼は改めて気づいたのだった。 ああ、おれは彼女に救われたんだあ……。 ペーニヨの頭の中、南無子のイメージが漂っていたが、それに重なるようにほかの幾人かのイメージが浮かんで消えていった。 いろんなやつらに救われて、それで今のおれがあるんだよなあ……。 そうして彼の頭の中のイメージが薄れて消えていき真暗な闇が広がる、今度は彼の耳に ボサツ という言葉が静かに響いた。 ボサツかあ……。 よし、名前は「伊豆山唐辛子菩薩」にしよ。 で、唐辛子はシンプルに鷹の爪だ。 うちの畑でしっかり堆肥入れてつくりやあ、それで十分うまいはずだ……。

襖越しに六畳間からガチャリと音が聞こえた。 たぬ兵衛がぼそぼそ

謝ってる声がある。どつやら酔っ払って酒のコップでもひっくり返したようだ。眞澄が何やら言っている声も聞こえてくる。

ペーニヨは想像してみた。明日の朝たぬ兵衛にこう言つたのだ。うちの新作、唐辛子ソースの名前、「伊豆山唐辛子菩薩イスサントウガランボサツ」にしよと思つてるんだあ……。たぬ兵衛がそのとき浮かべるだろう、皮肉だが優しい笑顔がペーニヨの頭にくつきり浮かんだ。

となりの布団では緋富ひとみと菜波なみが小さな寢息をたてながら寝ている。その音を聞きながらペーニヨは幸せな眠りの世界へと引き込まれていった。

「二 六年五丁六月 ちば・いちかわ」